

『雨宿りの場所——あめちゃん加入の日』

まだ、あめちゃんが第7席ではなかった頃。まだ、にゃんこと「相棒」と呼び合うよりも前。彼女には——帰る場所がなかった。正確には、

作ろうとしていなかった。

1. 流れ者

雨が降っていた。夜の街。傘も差さず、一人の少女が歩いている。

「あーあ……びしょびしょ」

名前は、あめちゃん。どこの組織にも属さない。誰かに命令されることを嫌い、誰かを従わせることにも興味がない。気が向けば誰かを助ける。面倒なら逃げる。昨日いた場所に、今日はいない。そんな自由気ままな流れ者。



「次どこ行こっかなあ」

行き先はない。それでも困ってはいなかった。これまでも、ずっとそうだったから。——一人の方が楽。誰かと深く関わらなければ、別れもない。だから、どこにも属さない。それが、あめちゃんの生き方だった。

そんな彼女が、その夜。奇妙な光景を目撃した。

「……ん？」

路地裏。一人の少女が、十数人に囲まれている。長い黒髪。黒と深紅の装い。

「あちゃー……」

あめちゃんが頭を掻く。明らかに面倒事。関わる理由はない。

「……見なかったことにしよ」

くるり。そのまま立ち去ろうとした。直後、背後から凄まじい轟音が響いた。

「……え？」



振り返る。十数人全員が倒れていた。そして中心には——先ほどの少女が一人。

「……………」

あめちゃんは目を擦った。もう一度見る。やっぱり全員倒れている。

「……何あれ」

少女——ヨルが、こちらを向いた。目が合う。

「……………」

「……………」

あめちゃんは静かに歩き出した。

「帰ろ」

「待つて」

「嫌で一す」

「なんで!？」



これがあめちゃんとヨルの、最初の出会いだった。

2. 変な人

「ついてこないでよ」

「同じ方向なんだけど」

「さっきから三回曲がってるんだけど？」

「偶然」

「絶対嘘じゃん」

雨の中。あめちゃんの後ろをヨルが歩いている。

「で？」

あめちゃんが振り返る。

「何？」

「私になんか用？」



「名前」

「……名前？」

「まだ聞いてない」

「聞く必要ある？」

「ある」

「なんで？」

「気になるから」

あまりにも堂々としている。あめちゃんは呆れた。

「……あめちゃん」

「ちゃんまで名前？」

「そういうことにしといて」

「私はヨル」

「知ってる」



ヨルが止まった。

「知ってるの？」

「そりゃね」

裏の世界にいれば嫌でも耳に入る。ヨルファミリア。そして、その頂点にいる少女。

「絶対最強の総帥様でしょ？」

「その言い方なんか嫌だなあ」

「事実じゃん」

「ヨルでいいよ」

「じゃ、ヨル」

あまりにも普通に呼び捨て、ヨルが瞬きをする。

「……普通に呼ぶんだ」

「いいって言ったじゃん」

「まあそうだけど」



あめちゃんは再び歩き出した。

「じゃあね、ヨル」

「どこ行くの？」

「知らない」

「家は？」

「ない」

ヨルの足が止まった。

「……ない？」

「うん」

あめちゃんは笑っている。まるで、なんでもないことのように。

「流れ者だから」



3. 雨宿り

しばらくして、雨脚がさらに強くなった。

「うわ、最悪」

あめちゃんが軒下へ駆け込む。ヨルも隣へ。

「まだいるの？」

「雨宿り」

「他にも場所あるじゃん」

「ここがいい」

「変なの」

二人並んで、雨を見る。会話が途切れた。ザーッという雨音だけ。しばらくして、ヨルが聞いた。

「一人で寂しくない？」

あめちゃんの表情が、一瞬だけ止まる。

「……何それ」



「そのまま」

「別に」

即答。

「一人の方が楽だよ」

「そう？」

「誰にも合わせなくていいし」

「うん」

「好きなところ行けるし」

「うん」

「面倒な人間関係もないし」

「うん」

「だから——」

あめちゃんは言葉を止めた。ヨルは何も言わない。ただ隣にいる。



「……だから、楽」

最後だけ少し小さかった。ヨルは追及しなかった。代わりに――

「じゃあさ」

「ん？」

「今日だけ、うち来る？」

あめちゃんが振り返る。

「……ヨルファミリア？」

「うん」

「私、入らないよ？」

「別に勧誘してない」

「ほんと？」

「雨宿り」

ヨルが空を見る。



「ここより屋根広いよ」

あめちゃんは思わず笑った。

「何それ」

「来る？」

「……………」

少し迷う。でも——

「今日だけね」

「うん」

「明日には出るから」

「分かった」

この時のあめちゃんは、本当にそうするつもりだった。



4. ヨルファミリア本部

「お邪魔しまーす……」

扉を開ける。最初に出てきたのは、まふ이었다。

「ヨル、おかえ——」

止まる。視線があめちゃんへ。

「……………誰？」

「拾った」

「犬みたいに言わないで!？」

「雨宿り」

まふいがヨルを見る。あめちゃんを見る。もう一度ヨルを見る。

「……ヨルが連れてきたなら、いい」

「いいんだ」

あめちゃんが若干引く。その奥からレモンも顔を出した。



「あ、新しい子？」

「泊まるだけ」

あめちゃんが即座に訂正する。

「明日出るから」

「そうなんだ」

レモンは笑った。

「じゃあ今日だけよろしく」

「……うん」

変だった。誰も、

「どこの人間だ」

とも、

「何が目的だ」

とも聞かなかった。ヨルが連れてきた。それだけ。



「あめちゃん、タオル」

「ありがと」

「着替えもあるよ」

「え」

「ご飯食べる？」

「……え？」

話が早い。気付けば。浴場を借り。乾いた服を借り。温かい食事まで目の前に置かれていた。

「……………」

あめちゃんが固まっている。ヨルが隣から覗く。

「食べないの？」

「食べるけど」

一口。温かい。

「……おいしい」



「でしょ？」

「ヨルが作ったの？」

「違う」

「なんで自慢げなの」

笑ってしまった。その夜。久しぶりに——あめちゃんは雨音を気にせず眠った。

5. 翌朝

朝。あめちゃんは荷物をまとめていた。もともと少ない。数分で終わる。

「よし」

部屋を見る。一晩だけ借りた場所。

「……行こ」



扉を開ける。廊下へ誰にも会わない。そのまま玄関へ向かう。
靴を履く。扉に手をかける。そこで――

「行くの？」

後ろからヨルの声。

「……うん」

「そっか」

引き止めない。あめちゃんは少しだけ意外そうな顔をする。

「止めないんだ」

「止めてほしい？」

「別に」

「じゃあ止めない」

「……そ」

扉を開ける。昨日の雨は止んでいた。青空。絶好の旅立ち日和。
和。一步。外へ二歩。三步。



「……………」

止まる。振り返る。ヨルはまだ玄関にいる。

「ねえ」

「ん？」

「ヨルファミリアってさ」

「うん」

「入ったら、ずっといなきゃダメ？」

ヨルは少し考える。

「別に？」

「勝手に出かけても？」

「いいよ」

「ふらっとどっか行っても？」

「帰ってくるなら」



その言葉。

帰ってくる。

あめちゃんの胸に、妙に残った。今まで、どこかへ行くことはあった。どこかから去ることもあった。でも——

帰る。

そんな言葉を、自分に使ったことはなかった。

「……帰る、か」

ヨルが首を傾げる。

「あめちゃん？」

「もし」

振り返る。

「もし私が入るって言ったら？」

「歓迎するよ」

即答だった。



「……戦力になるか分かんないよ」

「強いでしょ」

「なんで分かるの？」

「なんとなく」

「適当！」

ヨルが笑う。あめちゃんも、つられて笑う。そして、持っていた荷物を——玄関に置いた。

「……じゃ」

少し照れくさそうに。

「もう一晩だけ」

ヨルは何も指摘しなかった。

「うん」



6. もう一晚

翌日。

「もう一晚だけ」

「うん」

さらに翌日。

「……雨降りそうだし」

「晴れてるよ」

「夜降るかも」

「そっか」

さらに三日後。

「荷物整理してから出ようかな」

「分かった」

一週間後。



「……………」

あめちゃんは食卓で普通に朝食を食べていた。ヨルが向かいに座る。

「ねえ」

「何？」

「いつ出るの？」

「……………」

あめちゃんがパンを食べる。

「明日」

「昨日も言ってた」

「明後日」

「延びた」

「うるさい！」

ヨルが笑う。あめちゃんは顔を赤くして睨む。



「……そんなに追い出したい？」

「逆」

ヨルの声が少し優しくなる。

「もう、いていいんじゃない？」

あめちゃんの動きが止まる。

「……………」

「帰る場所ないんでしょ？」

「……うん」

ヨルは本部を指差す。

「じゃあ、ここにすれば？」

あめちゃんは何も言わなかった。言えなかった。欲しかった言葉なのかもしれない。でも、欲しかったことすら——ずっと認めていなかった。

「……ヨル」



「ん？」

「私」

少しだけ俯く。

「ここにいていい？」

ヨルは笑った。

「最初からいいって言ってるじゃん」

あめちゃんも、小さく笑う。

「……そっか」

そして、今度こそ自分から言った。

「じゃあ私——」

顔を上げる。

「ヨルファミリアに入る」



7. あめちゃん加入

正式加入の日。ヨルがみんなの前で告げる。

「今日からあめちゃん、うちのメンバーね」

「よろしくー」

レモンが拍手。まふいも静かに頷く。あめちゃんは少し落ち着かない。組織に所属するなんて初めてだった。

「……なんか変な感じ」

ヨルが隣で聞く。

「嫌？」

「ううん」

あめちゃんは本部を見渡す。昨日までと同じ景色。なのに今日は違って見える。もう自分は客じゃない。ここにいる理由がある。

「悪くない」



ヨルが笑う。

「でしょ？」

「でも自由にはさせてもらうからね」

「もちろん」

「勝手に出かけるし」

「うん」

「何日か帰らない時もあるかも」

「分かった」

「……………」

あめちゃんがヨルを見る。

「心配しないの？」

ヨルは答えた。

「するよ」



「じゃあ止めればいいじゃん」

「でも」

ヨルは笑う。

「あめちゃんなら帰ってくるでしょ？」

「……………」

また、その言葉。帰ってくる。今度は、あめちゃんも笑って答えた。

「……まあね」

エピローグ

それから少し後。あめちゃんはヨルファミリアの中で、一人の少女と出会うことになる。最初は、ただの仲間。気付けばよく一緒にいるようになり。いつしか——隣にいるのが当たり前になった。その少女の名前は、



にゃんこ。

後に二人は、

第7席・あめちゃん。

第8席・にゃんこ。

ヨルファミリアを代表する相棒同士となる。けれど、それは、もう少し先のお話。この日ヨルが拾ったのは、強力な戦力でも、第7席でもなかった。ただ——雨の中を一人で歩いていた、帰る場所を持たない女の子。

そしてあめちゃんが手に入れたのも、肩書きではなかった。初めて、

「ただいま」

と言える場所だった。だから現在でも長く外へ出ていたあめちゃんが本部へ戻る時だけは——

「ただいまー！」



誰よりも大きな声で扉を開ける。そして必ず。本部のどこかから声が返ってくる。

「おかえり」

あの日。雨宿りのつもりで入った場所は——いつの間にか、
あめちゃんの家になっていた。

END

